Honda Technical College Kanto
H-TEC TOPICS
Honda Technical College
VOL.31

学校法人 ホンダ学園
ホンダ テクニカル カレッジ 関東
〒356-8567 埼玉県ふじみ野市鶴ヶ岡5-2-2
TEL.049-264-0121　FAX.049-278-1190
発行責任者 山田 幸昌
2016 春季号
http://www.hondacollege.ac.jp/honda_e/

平成28年度 第41回 入学式

第41回入学式 215名の新入生を迎え入れました。
4月11日 ツインリンクもてぎ（栃木県茂木町）で
2016年度入学式を執り行いました。

今年度は関東校で215名、姉妹校である関西校を含めるとホンダ学園として436名の新入生を迎えました。式には理事長を務める本田技研工業㈱の峯川専務執行役員をはじめとする来賓の皆さまと後援会役員の皆さま、そして多くの保護者の皆さまにもご参加いただきました。式辞の中で山田校長は「実践技術は現場・現物で磨くしかありません。夢や目標を持ってしっかりと学んで下さい」と期待の言葉を述べられました。新入生の皆さんはそのままツインリンクもてぎに滞在し15日まで研修を行ないました。

本田技研工業 峯川専務執行役員様
ご祝辞を頂きました

「ご入学おめでとうございます」
式辞を読む山田校長

歓迎の意を伝える
在校生代表2年生の横瀬さん

新入生を代表し
「誓いの言葉」を読む太田さん

ツインリンクもてぎ 新入生 校外研修

入学式終了後すぐに、ツインリンクもてぎを貸し切って、5日間の校外研修がはじまりました。目的は友達を作ることです。夢や目標を目指している時、挫折しそうになることもあるかもしれませんが、そうした時、相談をしたり、愚痴を聞いてくれたりする友達やクラスメイトの存在は心強いものです。またクルマやバイクに対する興味を深めてもらい、私たちHondaをさらによく知ってもらう為、モータースポーツの聖地であり、歴代のHonda車両が収容されているツインリンクもてぎを入学式・研修会場としています。研修ではクラス毎に一体感を構築する為の「スキルアップアドベンチャー」や「安全運転講習」「コレクションホール見学」「クラス別HR学生生活宣言！」等を行ないました。時間の経過と共に自然と会話が生まれ、クラスの雰囲気が明るく賑やかに変化していきました。研修を終えた新入生の皆さんは友達が増え、挨拶を交わす仲間も増え、夢や目標に挑む準備ができたようです。新入生の皆さん、研修お疲れ様でした！

新入生 Interview
インタビュー

自動車開発
エンジニア科
岡野 紗弥さん

父が自動車関係の仕事をしていたこともあって、私も自動車関連の仕事に就くことを目標にしています。整備ではなくモノを作るほうに興味を持っており自動車開発の事が学べるホンダ学園に進学しました。学校で学ぶことと、語学力を生かし将来は世界中で活躍できるエンジニアになることが夢です。授業はもちろんですが、部活などいろいろなことに挑戦し、失敗と成功を体験しこれからの力にしていきたいです。

自動車開発
エンジニア科
太田 智晴さん

数ある自動車大学校の中で、F1チーフメカニックをやっていた人が先生をやっているような学校はホンダ学園だけでした。きっと面白い経験ができると思いました。将来の夢はまだ漠然としていますが、既成概念にとらわれない新しい自動車開発ができたらすごいと思います。高校は普通科なので教科書を理解するのに苦労することもありそうですが、学生フォーミュラなどクラブ活動にも参加して夢を目指そうと思います。

MOTOR SPORT JAPAN 2016

モータースポーツジャパン2016

4月16日～17日「モータースポーツジャパン 2016 フェスティバル in お台場」が開催されました。「モータースポーツを通じて、クルマやバイクの魅力をもっと伝えていきます！」というスローガンのもと、モータースポーツに参戦する国内の主要メーカーが合同参加しているイベントです。

今年も参加のお声がけをいただき、学生のモータースポーツクラブ活動での取組みや学生が製作した車両を一般のお客様に公開し、ホンダテクニカルカレッジ関東のPR活動を行ないました。当日は在校生が中心となりブースを訪れたお客様のご質問にお答えし、クラブ活動や学園の説明を行ないました。この日の為に、卒業生も応援に駆けつけてくださり、学園のPRにご協力いただきました。

ミニバイク部 7時間耐久 クラス11位

ツインリンクもてぎ(栃木県)で誰でもエンジョイ耐久(DE耐)が開催され、ミニバイク部の選抜メンバーが出場しました。出走は69台。ライダー3人体制で7時間を走り周回数は112周。クラス11位の成績を獲得しました！

レースが行われたのはゴールデンウィーク最終日の5月8日。晴天で夏を感じさせるような強い日差し。爽やかな風の吹く中で7時間のレースはスタートしました。出走は20番グリッド。前回大会は100番台だったので大幅にスタートポジションがアップしています。

レース開始40分後、予定よりも少し早く給油を行い第2ライダーへバトンタッチ。マシンのスピードが上がらず1時は40番台まで順位を落とすも、レース開始から2時間半後、第3ライダーへバトンをつなぎ順位はスタート時の20番まで回復しました。マシンの調子が上がらない中、21リットルの燃料制限により完走が危ぶまれたことから、レース後半は燃費走行を余儀なくされることに。給油のためのピットストップも影響し順位を37位まで下げて最終ライダーにバトンをつなぎました。

燃料の心配が消えたことで最後の30分は攻めの走りに徹しチェッカーを受けました。マシンの調子が上がらない中、ライダー達の技量で燃料を温存し完走につなげました。また今回は車検も順調にクリアしておりレース中のペナルティもゼロ。メカニックとライダーが一丸となってがんばりました。

今後は地元のサーキットで練習走行を行い、夏はスポーツランド菅生(仙台市)で6時間耐久に挑戦します。

今年もミニバイク部の応援をよろしくお願いいたします。

トライアル 世界GP 観戦バスツアー

4月24日ツインリンクもてぎ(栃木県茂木町)でFIM トライアル世界選手権 第2戦 日本グランプリが開催されました。自整科2年生の武井選手がトライアル2クラスに出場する為、毎年恒例の観戦バスツアーは応援も兼ねて35名の学生が参加しました。国内大会で活動している武井選手ですがグランプリでは世界から集まったライダーと戦いました。決勝は怪我の為途中リタイアとなりましたが、初日はクラス16位で健闘。今後の活躍にご期待下さい！

スポーツ大会 クラス対抗 綱引き大会開催

1年生を対象としたスポーツ大会を開催いたしました。各クラスの団結力を強める為、毎年開催しています。決勝に近づくと白熱した綱引きが展開され、観戦中の学生も大きな声援を送っていました。そして見事優勝の栄冠を手にしたのは、開発2組Bチームの皆さんでした！今後は、年間を通して総合優勝を競います。

東京大学合同 海外ヒストリックラリー 挑戦プロジェクト

Histric Rally Abroad Project

Targa Bambina 2016

東京大学工学部の正式な授業の一環として、モノづくりと国際化教育の融合をテーマに、人間形成や工学的な知識の獲得、学生生活では得られない社会経験を目的として行なわれているプロジェクトです。2015年より研究科3年の選抜メンバーがプロジェクトに加わりました。ラリー出場を目指し、1975年式ホンダシビックをレストア。ラリー仕様に変更し、今年3月ニュージーランドで開催されたタルガバンビーナ2016に2台体制で出場しました。パリダカールラリーで日本人初の総合優勝を成し遂げた篠塚建次郎さんがドライバーを務め、最後はワンツーフィニッシュで完走することができました。6月には新しいプロジェクトメンバーが集まりキックオフが行なわれます。

009号車、010号車 ワンツーフィニッシュで完走しました

学生がレストアした
1975年式
Hondaシビック

卒業生 INTERVIEW

念願の一級自動車整備士資格を取得しました。

一級自動車整備研究科卒 飯田さん

試験対策が始まったのは10月くらいですが、今思うとよくあれだけの勉強をしてテストをこなしてきたと驚くばかりです。今でも覚えているのは、自分の実力を数値で可視化されたときでした。「これからどうするのか？」先生の質問は分かりやすい。言い訳は覆され結局自分の現状を受け入れ、勉強に向き合うようになりました。「試験対策」。言葉で言うと簡単ですが最初は大変でした。

勉強が軌道に乗り始めると今度は不安との戦いが始まります。本当に大丈夫なのか。試験問題やテストがないと不安で試験への意欲が強くなるほどに手が震えたり不安に襲われました。

「絶対に合格してみせる」という気持ちと裏腹に、不安との戦いの日々でした。そうした日常をやり遂げられたのはクラスメイトのおかげです。僕と同じように毎日自分と向き合い、戦ったかけがえのない戦友たちです。クラス一丸となってお互いを支え合いました。

迎えた試験当日、できる限りのことを尽くしました。泣くつもりなんてなかったけど、自然と涙が流れました。そして先生の前で大泣きしました。試験の結果を両親に報告した時、両親も一緒に泣いてくれました。「よくやったね」と。

僕は一つの大きな目標に全力で挑みました。志が叶わなかった仲間もいます。それでも僕たちが過ごしたこの一年間は一人一人にとってかけがえのない時間になったと信じています。

一緒に戦ったクラスの仲間たちと、僕を引き上げてくれた先生方、そして両親に感謝いたします。本当にありがとうございました。